・青森県農協中央会会長賞

真心おむすび

第二中学校（八戸市）
二年　橘（たちばな）　如（なお）　花（か）

祖母は、私の料理の先生だ。ご飯の炊き方や包丁の使い方など、祖母から教わったことは数知れない。

料理をおいしくする魔法もその一つだ。それを教えてもらったのは、一緒に祖父のお弁当を作っていたときだ。祖母は、手際よく卵焼きやハンバーグ、煮物などを作り、弁当箱につめて冷蔵庫にしまった。私は、祖父がいつもおむすびを一つもっていくことを知っていたので

「おかずだけ？おむすびは？」

と、祖母に尋ねた。祖母は、

「おむすびは、炊きたてのご飯で作ったものを食べて欲しいからね。」

と言って、笑った。祖母は、「料理に真心を込めるとおいしくなる」と教えてくれた。私は、

「真心おむすびだね。」

と、祖母に笑いながら返した。

今年の夏は、特に暑かった。剣道大会の前日、何だか寝つけず、私は寝坊してしまった。私が、顔を洗って、家を出ようとすると、

「ちょっと待ちなさい。」

と、祖母が遠くで言った。

「何、急いでるんだけど。」

と、私は、いらだちを隠すことなく答えた。しかし、返事はない。しばらくすると、祖母が玄関まで走ってきた。

「これ、車で食べなさい。」

と、アルミホイルに包まれたおむすびを私に手渡した。

「うん。ばいばい。」

私はそっけなく返事をして、車に飛び乗った。私は、おむすびを食べなかった。

大会は、団体戦は初戦敗退、個人戦は二回戦敗退、という結果だった。実力不足もあるけれど、おなかが減って力を出し切れなかったのが悔しい。私は、情けなくて、下を向いたまま何も言わず、迎えの車に乗った。

私は、ふと、祖母が手渡してくれたおむすびを思い出した。アルミホイルの包みを開いてみる。こうばしいみその香りが、食欲をそそる。朝ご飯を食べていない私を気遣い、忙しいのににぎってくれた「真心おむすび」。祖母のぬくもりを感じた。私は、大きな口でおむすびにかじりついた。やっぱり、おばあちゃんのおむすびは最高だと、心から思った。と同時に、温かいうちに食べれば、もっと悔いの残らない試合ができたかもしれない……、と後悔した。

一人部屋のベットで寝ころんでいると、「真心おむすび」について、色々なことを思い出した。保育園のお弁当に入れてくれた「ふりかけおむすび」。小学生のとき、貧血気味の私のために作ってくれた「ひじきおむすび」。スイミングの前に、軽食として作ってくれた、「炊き込みご飯おむすび」。そして、今日も食べた、我が家の定番「みそおむすび」。

私は、その日の夜、大会の結果を報告しながら、「真心おむすび」の話をした。すると母が、

「如花は、生まれる前から『真心おむすび』を食べているんだよ。」

と言った。私の口から、思わず、「えっ。」という声がもれた。母は続けて言った。

「如花を産む前、具合が悪くて何も食べられなくてね。その時、おばあちゃんが一口サイズの塩おむすびを作ってくれたんだよ。」

その話を聞いて、私は、お米が食卓にあるのが当たり前の日本人に生まれてよかったな、と心の底から思う。私の体は、お米と真心でできている。これからもうれしいこと、楽しいことだけでなく、苦しいことも辛いこともあるだろう。でも、「真心おむすび」にパワーをもらいながら私は乗り越えていく。そして、いつか、祖母のように『真心おむすび』で、誰かにパワーをあげられるような人に私はなりたいと思う。